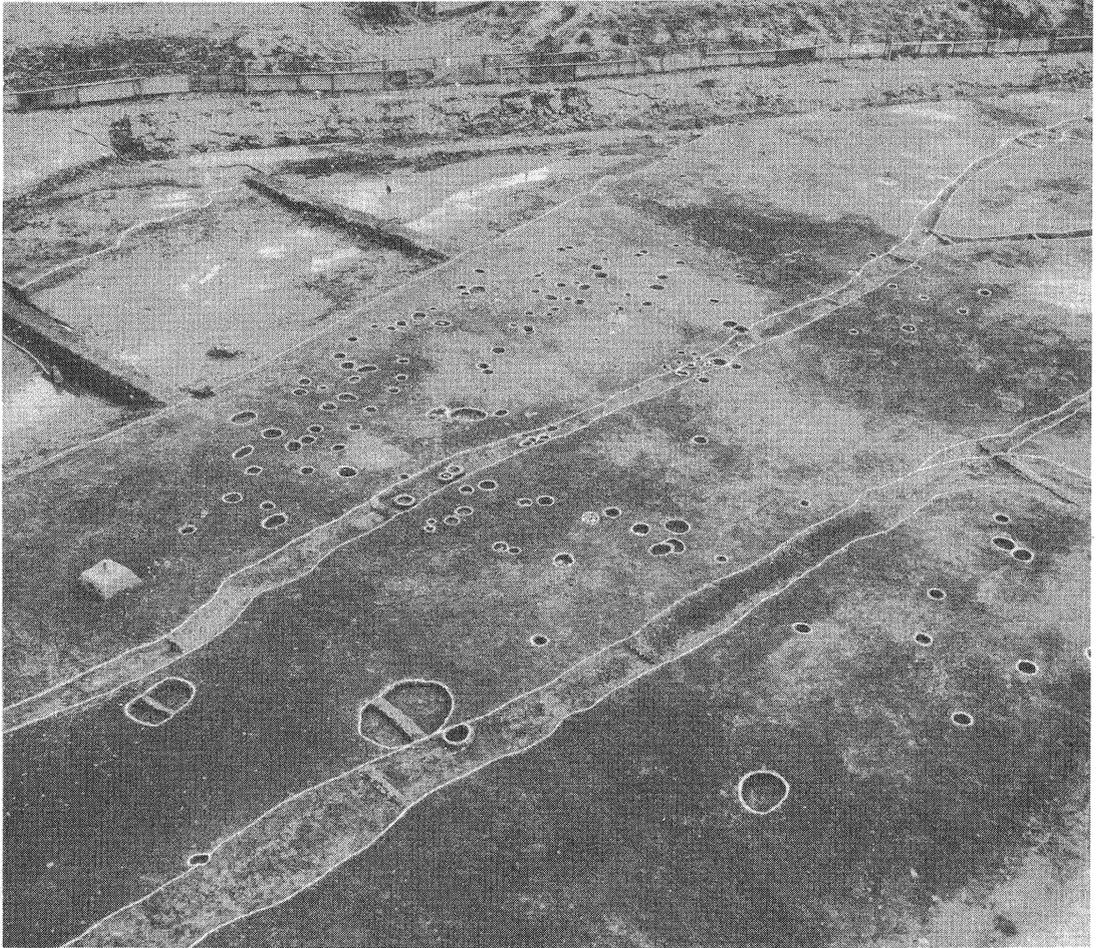


埋蔵文化財 愛知

No.11



勝川遺跡の木製品工房跡

勝川遺跡（春日井市勝川町を中心に広がる）の段丘下沖積低地で、弥生時代中期末の掘立柱建物群が検出された。その北側を流れる流路からは、鋤・鋤等の木製農耕具を中心とした未成品や原材を水漬け保管していたものと思われる施設が検出された。この地点が木製品加工を行っていた作業場で、建物群は作業小屋や倉庫と推定される。弥生時代の集落内の、居住域・墓域とは別の、このような作業空間の存在を明らかにできたのは、全国でも初めてである。

（6・7ページに関連記事記載）

シリーズ 古墳の時代

最古の古墳をもとめて

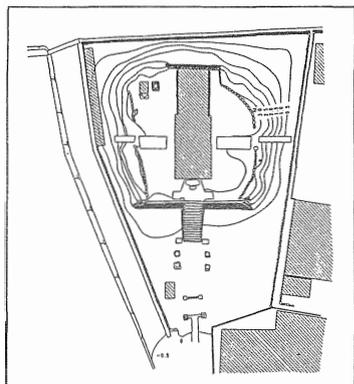
土器による区分

前回弥生時代～古墳時代にかけての土器、すなわち元屋敷（様式）土器群が二つに大きく大別できることを述べておいた。つまり形態の内彎志向というきわめて特色的なカタチの気風が定着し、S字甕・小型の器台の登場という新しい土器群が成立する前半、畿内系の土器が出現するとともに小型の器種が急増し、形態の内彎志向が喪失する後半である。

古墳時代が前方後円墳を中核とするきわめて政治的色彩の濃い時代であるとすれば、大型の前方後円墳の出現はまさに元屋敷様式後半の段階にあたるのであり、「古墳の時代」の幕あけはこの1点をもって位置づけることができるかもしれない。前方後円墳の登場と土器群での元屋敷様式後半への移行は社会的な出来事性をともしない具現していったものといえる。以下この前半～後半へ移行する不安定な時間を少し垣間見ることにしよう。

奥津社古墳

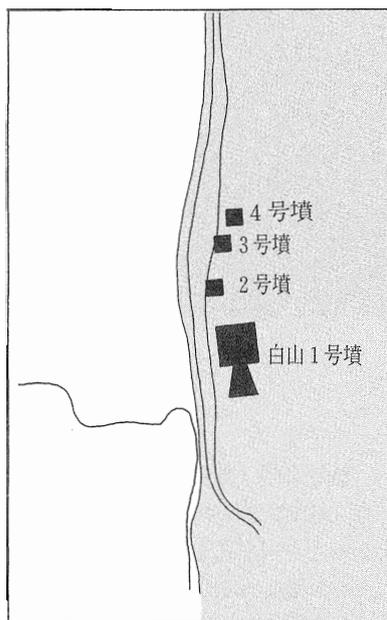
海部郡佐織町に奥津社が存在する。現在この地は標高-0.3mで、小丘の上部に奥津社社殿が建てられている。この社殿に長く保存されていた鏡が三角縁神獸鏡とわかったのは昭和51年のことである。つづく昭和52年には墳丘調査が



奥津社古墳 1:1000

実施され、人為的な盛土状況と封土中より元屋敷様式に所属する土器片が見つかった。現状では社殿がたつ小丘は一辺25mほどの方形状を呈し、高さ3.3mを測る。したがって本来の墳形と規模を推定する手掛りは少ないのであるが、少なくとも25m前後の主墳丘を持つ古墳であったことは確実といえる。奥津社古墳封土中より出土した土器には元屋敷様式前半でも最も新しい段階のものが混在し、奥津社古墳の築造がこの時期に近いものとの推測がなりたてば、少なくとも後半でも早い段階には古墳が営まれていた可能性が考えられる。するとここから出土したと考えられる3面の三角縁神獸鏡の意味はますます重要となる。

ところで主墳丘が25m前後として前方後円（方）墳を想定すると全長が45m前後となる。これに近い古墳をさがすとそれは以外と近くに現存する。濃尾平野犬山扇状地の小口白山一号墳がそうである。



白山古墳群

小口白山一号墳

小口白山一号墳は大口町小口に所在し、現在白山神社がその上に存在する。墳丘は大きく変形しているもののその西側はよく原形を留めており、墳丘長49m（後方部25×33m）の前方後方墳と考えられる。昭和57年白山一号墳の北側に展開する小規模な墳墓群が町教委により調査された。そこできわめて注目すべき事実が判明している。その成果を今まとめてみると、

1. 少なくとも小口白山一号墳の周辺には3基以上の方形周溝状の墳丘墓が存在する。
2. その所属する時期は出土した土器より元屋敷様式前半と考えられる。
3. 墳丘墓群と白山一号墳の間には土塚墓群が存在する可能性がある。
4. 墳丘墓は一辺10～12・3mの長方形を呈し、周溝は圍繞することなく開口部、あるいは何らかの施設をもつことが考えられる。

以上を総合すると、まずこれらの墳丘墓群は元屋敷様式前半の時期を中心につくられ、これを背景として白山一号墳が営まれた可能性が高い。するとその時期は前半～後半へ、少なくとも後半の早い段階には造営されていた可能性が

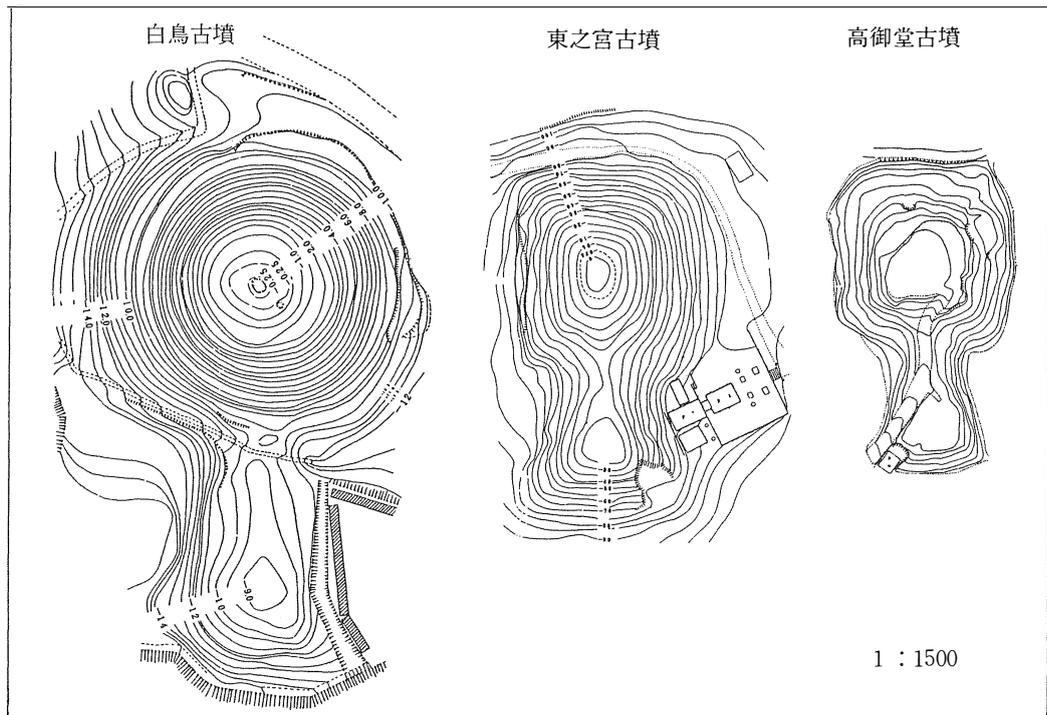
ある。つまり奥津社古墳ときわめて近い時期に築造されていた最も古い古墳の一つに加えることができる。

古墳への飛躍

元屋敷様式前半での墳墓の主体が従来からの方形周溝状の墳丘墓であることは近年の調査例からもあきらかである。ところが後半の段階に近づくとつれ奥津社古墳、白山一号墳という前方後方墳が築かれはじめ、続いて二ツ寺神明社古墳、東之宮古墳、高御堂古墳という前方後円墳（方）墳が造営されてゆく。そしてその過程で白鳥古墳のような100mをこすような大規模な前方後円墳が造営されるにいたる。前方後円墳二ツ寺神明社古墳、前方後方墳東之宮古墳は初めての80m級の大規模な古墳の登場であり、それまでの30・40m級の小規模な墳墓に比べ著しく巨大化する。この飛躍こそ元屋敷様式後半での「古墳の時代」を決定づけた最大の出来事である。（赤塚次郎）

参考文献

- 大口町教育委員会『仁所野遺跡』 1983
 岩野見司他『佐織町史』資料編2 1987.3



市町村だより

清水ノ上貝塚

南知多町教育委員会

清水ノ上^{しるぎのかみ}貝塚は、知多半島の南端に近い内海の谷に所在する縄文前期および中期を中心とする貝塚である。昭和45年夏に学術調査が行われ、南知多町教育委員会から詳細な報告書も刊行されている。縄文前期の土器は、質量ともに優れており、清水ノ上Ⅰ式土器～Ⅲ式土器として、それぞれ形式設定された。学史的には、清水ノ上貝塚の調査と報告をきっかけとして、停滞ぎみであった東海地方の縄文前期前葉の土器編年に関する研究が、再び活発化したという意義を持つ。

清水ノ上Ⅰ式土器～Ⅲ式土器の型式設定は、今日の研究レベルから見ても妥当であり、その資料的価値はますます高まっているが、各地域で、当該期の土器の研究が進むにつれて、形式内容の細部について、より詳しい情報が求められるようになってきた。具体的には清水ノ上Ⅰ式土器とⅡ式土器の細分に関する情報である。清水ノ上貝塚はまた、縄文早期末葉の時期に降下し、当地方の自然環境にも甚大な被害を与えたと考えられているアカホヤ火山灰についての情報が得られる可能性が高い貝塚として注目されるようになった。

清水ノ上貝塚の再調査はこうして計画された。調査はまた、南知多町誌編纂事業の一環でもある。

調査区は、前回の調査位置に接して、3 m×3 mのグリッドを2個設定した。調査は8月17日から開始され、延54日間を要して11月23日に一応の埋めもどしを完了した。なお調査区のうち1区は、包含層の上半の約80cmを掘った段階で完掘のめどが立たなくなり、後日の調査を期して埋めもどしている。

層序は前回の調査で確認した、A、褐色腐食土層、B、黄褐色粘土層、C、黒褐色有機土層、D、褐色混貝土層、E、黒褐色混貝土層、F、赤褐色混貝土層、G、褐色混細礫土層、H、赤

褐色有機砂質土層、I、黄褐色砂層、J、青白色砂層の10層を再確認したが、C、E、Hの各層を2～3層に細分することに成功した。また前調査で最下層と考えていたJ層よりも下位にK、黒褐色有機土層と、L、黄褐色細礫層を発見した。表土層からL層までの深さは平均2 mほどである。

今回の調査の成果としては、まずI・Jの両層がアカホヤ火山灰層であったことを確認できたことである。I層は赤褐色を呈する粒子の細かい砂層で、20～30cmの厚さで調査区全域に認められた。J層は基本的にはI層と同一の層であるが、色調が青白色を呈する砂層で、調査区の東隅で部分的に認められている。層中には多量の火山性ガラスが含まれており、東京都立大学の町田洋氏によって、極めて純度の高いアカホヤ火山灰層であることが確かめられた。アカホヤ火山灰は、当地方では20～30cmの厚さで降下したと考えられているが、現在地層中に残されるのは10cm以下の厚さである場合が多い。清水ノ上は丘陵の麓の凹地であることから、降下した火山灰が丘陵の斜面から流れて当地に二次堆積し、偶然降下時と同程度の層厚となって残されたのであろう。アカホヤ火山灰層の確認によってH層から出土した清水ノ上Ⅰ式土器は、当地方におけるアカホヤ火山灰層直上の土器という価値が加えられることになった。またアカホヤ火山灰層より下位に新しく認められたK層からは、縄文早期後葉の粕畑式、八ツ崎Ⅰ式・茅山下層式・鵜ヶ島台式の各土器群が出土した。茅山下層式・鵜ヶ島台式の各土器は愛知県下の沿岸部では初めての発見である。

K層にはプロック状に発育の良いハイガイが含まれており、周辺にかなり豊かな貝類の採取水域の存在を物語っていた。一方アカホヤ火山灰層より上位の各貝層からは、小巻貝を中心とした貧弱な貝類相が認められている。

清水ノ上Ⅰ式およびⅡ式土器の細分については、徹底した分層発掘によって得られた多量の資料を整理していく過程で、綿密に検討を加えていきたいと考えている。

(篠島小学校教諭 山下勝年)

遺跡紹介

比 良 遺 跡

比良遺跡は、名古屋市北部を流れる庄内川右岸の微高地上（名古屋市西区比良二丁目）に位置する。調査は環状2号線（国道302号線）橋脚建設工事に伴い、昭和62年6月25日から8月14日まで実施された。調査区は東西に三ヶ所（A、B、C区）設定されたが、このうち明確に遺構が検出できたのはB区のみであった。以下比良遺跡A、B、C区の概要を紹介する。

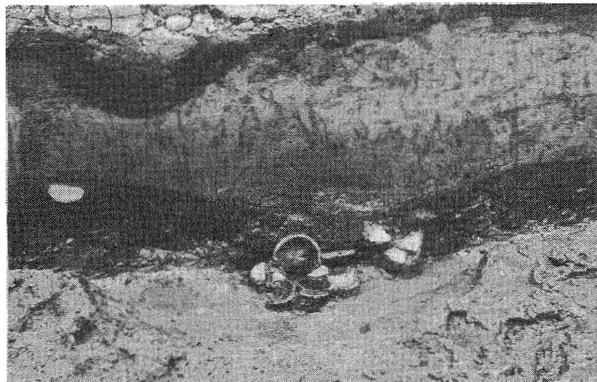
基本層序は、A～C区ともに現代の水田によって古墳時代前半の包含層中途まで削平されており、この下にさらに各地区同一レベルでシルト層（無遺物）が堆積している。このシルト層を間層として、その下に弥生時代前期の包含層が存在する。この包含層はその上面がB区において最も高く、標高約3.5m（T、P）を測る。A区との比高は約1mあり、C区では東に向かってゆるやかに下って行く。その下に再びシルト層が堆積し、最下層は粗砂であった。以上の層序から、比良遺跡の遺構面は大別すると、古墳時代前半と弥生時代前期の2時期に分かれる。以下これを上層、下層と仮称し、紹介する。

上層では、古墳時代前半の溝、小溝、小穴が検出された。溝は最低1回は掘り返された可能性が断面より認められるが、調査区内で関連遺構とみられるものが検出されていないため、その性格は不明である。同様に多数検出された小穴も、規則性、方向性などが認められず、性格は判じ得なかった。この上層の出土遺物は、ほとんど遺構に伴う形で出土していない。須恵器は含まれておらず、土師器によって構成されており、甕、高付、台付甕、壺等の破片が出土している。時期的には、わずかに含まれる欠山期のものを除いて、

元屋敷期以降のものである。

下層においては、シルト層を全体に取り払ったところ、完全に埋設しきらずに地表にくぼみを残している状態の土壇状の落ち込みが、数ヶ所確認できた。他に土壇12基が検出され、これに伴い弥生時代前期の遺物が出土した。包含層中も含めて、この下層の出土遺物は弥生時代前期のものに限られることが注目される。検出された土壇は、埋土の分析などが未了ではあるが、土器の出土状態などから、廃物処理を目的とした可能性が強い。これはこの時期の居住域が近在する可能性を示すものであるが、調査区内では検出できなかった。出土遺物は石製品、壺蓋、壺、甕、二又注口状土器片等多数であった。しかし条痕文系の土器片はわずか数点しか含まれておらず、ほとんど、遠賀川系土器で構成されている。これらの遺物は、現在整理検討中である。

尾張西部地方は、遠賀川式土器文化が直接影響を及ぼした地域の東端にあたり、その事実が知られているにもかかわらず、良好な同時代資料に乏しいのが現状である。縄文文化と弥生文化の間で、プリズムの役割を果たし得たのが当地方ではないだろうか。今回の比良遺跡の調査は、こうした事実を解明する上で貴重な資料となるであろう。（松田 訓）



弥生時代前期の土壇断面と土器出土状態

資料紹介

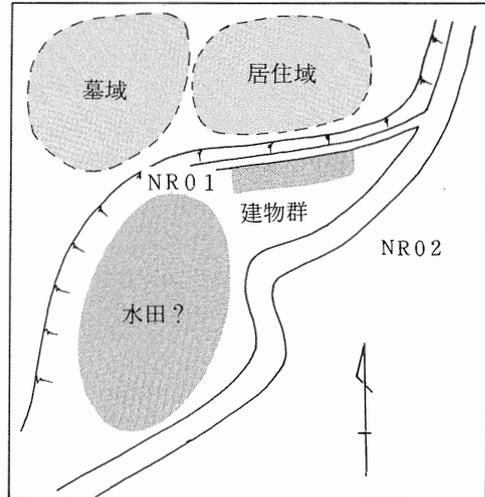
勝川遺跡の木製品工房跡

勝川遺跡は、春日井市勝川町五丁目を中心に、鳥居松段丘上とその直下に広がる旧地藏川までの間の沖積低地上（標高約11m）に立地する、弥生時代～古墳時代の集落跡と奈良時代の寺院跡を中心とする複合遺跡で、その広がりはおおよそ12万㎡に及ぶものと推定される。

弥生時代の勝川集落については、現在までの調査でおおよその構造について推測しうるに至っている。昭和40年に春日井市教育委員会によって調査された南東山地区では、中・後期の竪穴住居跡が検出され、この一帯が居住域に比定されるが、この地区の調査が以後行われておらず、その広がりや環境等の存在については明らかではない。しかし、今までのところJR中央線西側において住居跡等が検出されておらず、その西端はこの付近と推定できる。中央線西側には方形周溝墓を主体とする墓域が広がり、時期による占地に変遷が見られ、古墳時代前期まで周溝墓が築造され続ける。昭和57年に行われた居住域直下の沖積低地の調査（57I区）で、段丘崖に沿って流れる小流路と、その南側に掘立柱建物群が検出され、周辺の土坑のうち2基には、木棺の原材料と思われるコウヤマキの板材が5枚組で遺存し、小流路中から鋸の未製品等が出土した。

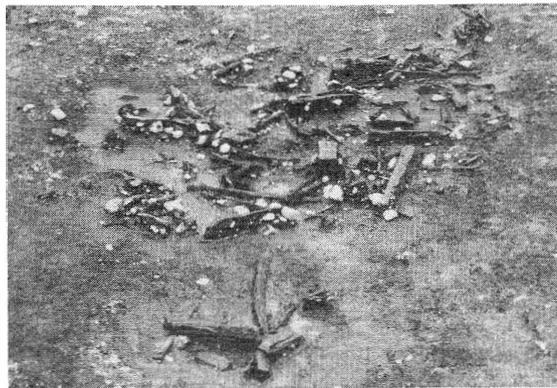
今年度この57I区の東側を、約4,500㎡にわたり調査し（62F区）、この空間の続きが検出され、新たな知見を得ることができ、以下57I区を含めこの空間について述べる。

この空間は居住域の直下に位置し、段丘崖に沿う幅7m程の小流路（NR01）と、旧地藏川の旧流路（NR02）に挟まれる。遺構検出面には一面に乾痕が残り、一帯が湿潤な地であったことを示している。NR01の南縁には、90mにわたって24棟以上の掘立柱建物が検出され、その範囲は西へ若干広がると思われる。また、



集落模式図

東端は62F区で確認され、この空間のほぼ全体像を明らかにすることが出来た。この建物群は4～5棟の群の幾度かの建て替えによるもので、62F区で建物が集中して検出された前面のNR01中に、最大幅5m・長さ8m・深さ40cm程の洋梨状を呈した落ち込み（SX01）が掘削され、その中に農耕具を中心とした木器の未製品・原材料・欠損品等が遺存していた。又、その埋土中からは、石斧等各種の石製加工具・砥石・多数の中期末（高蔵式）の土器が検出された。



SX01 全景

これらの各遺構は、中期末～後期初頭の洪水層（砂礫層）によって埋没している。

この様な遺構・遺物が検出されたこの空間の理解については、以前に木製品加工に関する作業空間で、建物群はその作業小屋や倉庫であると推測したが、未製品等の出土が稀少でその確証を得るに至らなかった。しかし今回SX01が検出され、多数の原材や未製品が出土し、この推測が正しかったことを示した。SX01はその埋土の状況から、水たまり的な状態を呈していたもので、この中に原材や加工途中の未製品を保管していたものと思われる。出土した未製品には、鋏・鋤身・石斧の柄等があるが、鋏・鋤身はすでに分割を終えた段階のものばかりで、板材や分割前の段階のものは含まない。

今回検出されたSX01と同様の、未製品保管の施設が神戸市玉津田中遺跡・松江市西川津遺跡・北九州市守恒遺跡・同市カキ遺跡で検出されており、各遺跡も集落に隣接した流路や谷地に土坑状の落込み（玉津田中・守恒）や、杭によって作られた方形の囲い（西川津・カキ）中

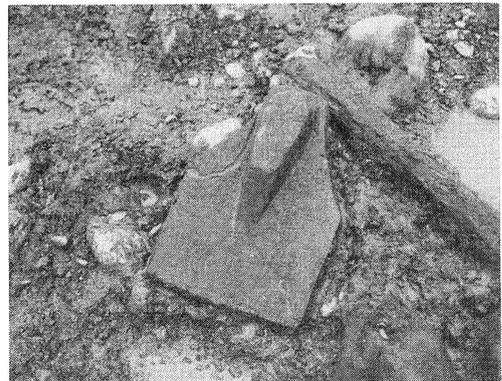
に、未製品が水漬けされていたであろう状態で出土している。このことから当時の木製品加工においてこの様な保管が広く行われていたことが推測されるが、その理由については、水漬けされている未製品が、堅いカシ等の広葉樹を利用した農耕具が大部分をしめている点で共通しており、この材質に関係しているものと思われ、水漬けすることにより樹脂を抜き、割れや狂いを防いだり、堅い材を加工しやすくしたと考えられ、当時の木製品加工技術の一端を知ることが出来る。又、西川津遺跡・守恒遺跡では、この施設に隣接して掘立柱建物が検出されており、この様な作業空間が同様の構造をなしていた可能性がある。

この様な木製品加工に関する作業空間が、当時の集落内において居住域とは別に、隣接して占地していたことを明らかにした勝川遺跡の調査は、当時の集落構造を解明する上で重要なものとなる。今後同様の調査の増加に期待したい。

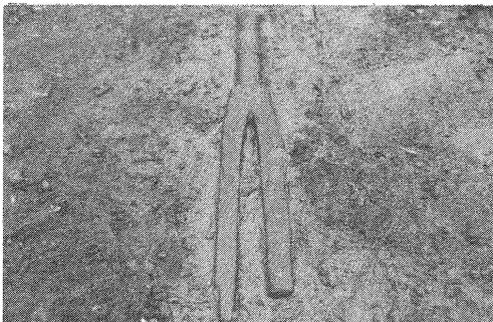
（丹羽 博）



広鋏未製品



広鋏未製品



二又鋤(鋏)



石斧の柄未製品

愛知県埋蔵文化財 調査センターがオープン

愛知県埋蔵文化財調査センターがこのほど完成し、12月1日にオープンしました。

この施設は鉄筋コンクリート造3階建て、延床面積 3,926㎡の建物で、古墳の墳丘を思わせるような屋根の曲線、土層をあらわしたコンクリート、ホーロー被膜鋼板、ラスタ釉磁器質タイルからなる正面外壁、尾張弥生時代に特有な円窓付土器からヒントをえた大形円形窓など、建築デザインにも埋蔵文化財に関する考え方が強く反映しています。

各室は、作業の流れにしたがって機能的に配置されており、一階には、発掘された埋蔵文化財を搬入する荷解室、水洗・乾燥室、出土品の分類・注記・復元作業を行う第一次遺物整理室、脆弱な木製品を科学的に保存強化するための木製品保存処理室及びその収蔵庫などがあります。二階には、所長室、事務室、出土品を展示する資料管理閲覧室・展示ロビー、学術的に

お・知・ら・せ

専門研修会

1月26日(火)～1月27日(水)

場所：愛知県埋蔵文化財調査センター

2階研修室

市町村の埋蔵文化財担当者を対象とする。

セ ン タ ー 一 日 誌

人事異動

退職 10月31日 丹羽 博(嘱託)

福岡県豊前市教育委員会へ

採用 11月1日 菅 沼 良 則(嘱託)

来訪者

9・17 土岐市文化財審議委員 12名。

10・20 名瀬地区高校社会科研究会 40名。

11・28 清洲東小学校5・6年生 200名。

12・17 富山県埋蔵文化財センター職員 2名。

記 録

12・1～8 愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて、埋蔵文化財展を開催。参観者は、834名。

期間中の12月6日に埋蔵文化財講演

価値高い遺物を収蔵する特別収蔵庫C、関係図書類を収納する図書室、研修会や講演会などに使用する研修室、会議室が配置されています。

3階は、収蔵・調査研究フロアで、研究室、報告書作成作業を行う図面遺物整理室、写場、鉄製品の保存処理を行う保存科学処理室、出土遺物の材質などを調べる科学分析室、記録保管室、2層の収蔵棚を持つ収蔵庫Dなどがあります。

埋蔵文化財調査センターでは、出土品の収蔵保管、埋蔵文化財の調査研究、埋蔵文化財に関する資料の収集と情報提供、各種の普及活動などを行うとともに、将来的には、遺跡の保存整備などを目的とした学術調査も実施して、本県における埋蔵文化財保護行政の一層の推進を図っていきます。

また、開所に合わせて、昭和60年4月に設立された財団法人愛知県埋蔵文化財センターも同所内に移し、引き続き開発事業に伴う発掘調査や、普及・啓発事業を行っていきます。

(愛知県埋蔵文化財調査センター)

- I. 木材の同定 木方洋二氏。
- II. 世界の中の縄文・弥生 佐原 真氏。
- III. 埋蔵文化財行政の現状と課題 伊藤 稔氏。
- IV. 条痕文土器 大参義一氏。
- V. 古代の瓦 森 郁夫氏。

会を開催。講師は、名古屋大学教授、梶崎彰一氏、演題「中世のやきもの」参加者は、194名。

現地説明会

10・31 志貴野遺跡 参加者 約 200名。

11・14 諏訪遺跡 参加者 約 300名。

埋蔵文化財愛知 No.11

発行 昭和63年1月
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
宇野方802番24

TEL 05676-7-4161
印刷 東海プリント社